



随筆

昆明への旅

竹本喜一*

中国大陸の南西部、ビルマ・ラオス・ベトナムなどの国々と境を接する奥地に雲南省という、日本より広い面積をもった地方がある。首都は昆明で、ここは海拔1920m、北西はるかチベットの山なみにつづく高原都市で、一年中花が咲きみだれ、気温も20度前後で、まさに年中春の感じの小ざれいな町である。この町は、外人には1978年の秋にはじめて解放されたばかりで、自然科学系の大きなシンポジウムも今回がもちろん、中国化学会にとってもはじめての経験であった。そんなわけで私の昆明での一週間の滞在は、たいへん印象深いものであった。少しばかり、さまざまな経験をふまえた印象記をつづってみたいと思う。

高原の町での討論会

私がこの町を訪ねたのは、昨1981年の9月半ばのことである。すでに何カ月もつづいた雨季もすぎ、ほとんど連日天候にも恵まれた、すがすがしい秋の季節の滞在となった。

私の専門は高分子化学で、今回「機能性高分子」を主要テーマとする中国化学会主催のシンポジウムに参加することになった。発表や討論の専門的な内容については他にゆずるが¹⁾、シンポジウムは中国各地から140名、各国から5名の招待講演者（日本から小生、他に米国、欧州など）の参加をみて、文化大革命後の平和な学会の幕明けとなった。

シンポジウムは円通賓館というホテルで開かれ、このメイン・ビルディングにほとんど全員が泊りこんで行なわれた。このホテルには広大な庭園があって、別荘風の建物がいくつかあり、私たち外国からの客はそこに泊ることにな

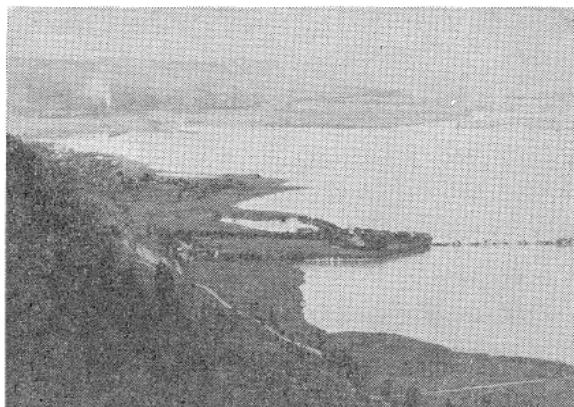


図1 昆明の町(上方)と湖(西山への道からのぞむ)

った。昆明は観光地としてもたいへん興味ある町なので、最近では外人向けのモダンなホテルもいくつか建てられている。私たちの円通賓館には300名以上を収容できる大講堂のほか、4つの分科会を行なうための会議室もあり、設備もゆき届いていて、私たちが何不自由なく過ごすことができた。将来、もっと多くの国際会議なども誘致できる体制は充分ととのっているように感じられた。

機能性高分子という学問は、イオン交換樹脂、高分子触媒、感光性樹脂、医用高分子など新しい高分子材料の基礎ならびに応用面をカバーする学問である。中国でも文化大革命の終わった直後、ちょうど3年ほど前、私が中国科学院の招へいをうけて、各地の大学へはじめて機能性高分子の講義に出かけたときからみると、その関心の高まりは異常に大きいことがうかがえた。シンポジウムの初日は、われわれ外人の招待講演だけが、講演、討論とも全部英語で、中国語への通訳もなしで行なわれた。2日目からは分科会形式をとって各専門別の討論がなされたのだが、この方は中国語が主であった。テキストはしかし、全部英語で書かれており、短い要旨が文頭に中国語でつけられていた程度であ

*竹本喜一 (Kiichi TAKEMOTO), 大阪大学, 工学部, 石油化学科教授, 工学博士, 高分子化学



図2 シンポジウムの開かれた円通賓館（この別館では1つの分科会が開かれた）



図3 タイ族系の女子学生（雲南民族学院にて）

った。中国の英語教育は最近相当熱心なもので、科学者の英語もかなり上達してきており、あと何年か立てば、欧米での国際会議の席で充分わたり合えるようになろうと、私は感じた。

今回の5日間にわたるシンポジウムのお世話を引き受けたのは、北京の中国化学会の方々のほか、地元にある雲南大学化学系の先生方であった。細かいところまで行き届いたサービスがなされ、このような協力があってこそ、この大

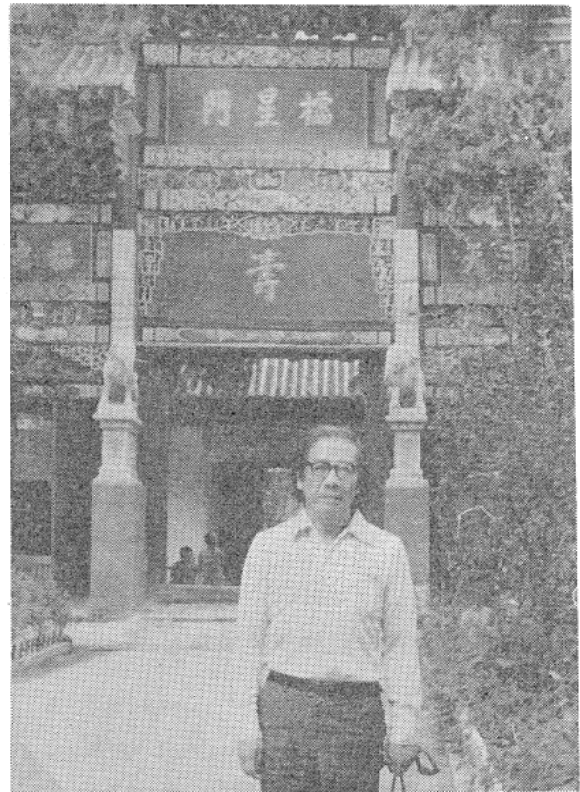


図4 銅の寺（金殿）の山門と筆者

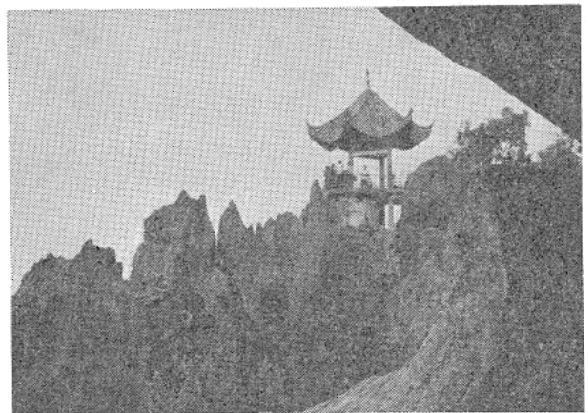


図5 石林の風景

きいシンポジウムが成功裡に運ばれたのであろう。

雲南大学は市内の高台にあって、数十年前に創設された歴史のある大学で、広大なキャンパスに3000人ほどの学生を擁していた。自然科学では数学、物理、生物、化学といった理科系のほか、工科系も充実していたように思う。昆明を中心とする高原地帯には、周辺に近代的な工業が育ちはじめ、私たちの専門の方ではプラスチック関連工業も盛んであると聞いた。雲南省には、比較的大きい都市が少ないため、この町

表1 雲南省における脊椎動物の種類中国全土との比較(動物研究所のデータによる)*

種類別	目	科	属	種	中国全土に占める雲南省の%
淡水魚類	11 (17)	25 (41)	128(203)	300 (671)	45
両棲類	3 (3)	9 (11)	20 (35)	72 (201)	34.2
は虫類	3 (4)	14 (21)	58 (99)	122 (300)	40.6
鳥類	19 (21)	65 (81)	290(392)	738(1166)	63.37
哺乳類	19 (13)	34 (49)	116(200)	235 (468)	50.2

*) カッコ内の数字は中国全土のデータをあらわす。

が産業、文化あらゆる面での中心になっているように感じられた。

民族学院や研究所など

雲南省は、少数民族の宝庫といわれるように、たくさんの種類の民族が住んでおり、これらの若者のために雲南民族学院という全寮制の大学が設けられていた。もちろん、これらの青年は一般の大学へも、わけへだてなく入学することができ、漢民族と生活面で何ら変わるところはないが、郷土色豊かな美しい衣装をてんでにまとい、樹木の多い学院の広いキャンパスには、授業が終ったところは花が咲いたような感じがあった。私たち外人は滞在中にこの学院へも招かれ、多くの人とたのしく交歓することができたが、若い男女学生の中には、すごく英語のうまい人もたくさんいることは、たのしく感じた。

まわりを高い山なみに囲まれた昆明には、広大な植物園をもつ植物研究所や、動物関係の研究所もあって、これらはやはり中国科学院に属していた。植物研究所の主な建物は割合新しく、また内部には最新のNMRはじめ多くの近代的な分析装置が、ここには一般の研究所の平均より、ずっとよく揃っていたように思った。ここ雲南省が中国の中でも、如何に動物、植物の種類が豊富で、かつ珍しいものが多いかについては、あちこちでよく語られたが、山地で百頭以上の象の大群に会ったなどという研究者の体験談などを聞くにつけ、中国大陸の広さをつくづく感じないわけにはいかなかった。一例と

して、表1をご紹介しておく。とくに鳥類や哺乳類は、この省だけで中国全土の50%以上の種類に恵まれていることに気づいていただけるであろう。

昆明の町、あちこち

2000年以上の歴史に彩られた昆明の町は、中心部は街路樹も多く、広い道が縦横に通じていて、北京や上海にいるのとあまり変わりはないが、町をとり囲む郊外には、おびただしい数の寺院や名勝が点在している。北京などとちがって地方都市だけに、寺院の境内も荘大で、一つの寺を訪れると半日くらいを費してしまう。われわれが訪れた寺の一つに金殿というのがあったが、この寺は16世紀、明の時代に建立された比較的新しいものだが、このあたり銅の精錬地だけあって、寺院の扉、柱から仏像にいたるまで全部銅でつくられていて、いかにも重々しい感じが印象的であった。

昆明での、何といても最高にすばらしい風光は、別名昆明湖と呼ばれる滇池と、その西岸にそびえる西山のたたずまいであろう。昆明の町自体はこの湖の北岸に位置している。西山には岩壁をくりぬいて頂上近くの竜門まで、徒歩でのぼることができる道が通じている。竜門から眼下に目もくらむような湖を眺めながら、はうようにして登って来た道に点在する寺院をふりかえてみると、それは正に桃源境の絵をみるよう風景であった。湖の北岸には17世紀末、清の時代に建てられた大観楼があった。この楼は楊子江岸の黄鶴楼などとともに中国三大名楼

の一つに数えられている、との話であった。

シンポジウムの3日目は、参加者全員が3台の大型バスに分乗して東南方向、昆明からさらに120kmも山の中にある石林という奇勝へエクスカージョンに出かけることになった。バスで3時間も走った秘境にあるこの石林は、奇妙な石灰岩でできた広大な台地で、展望台に立つと一面が全く石柱の海といった感じである。一つ一つの石柱は高さ20~30mにも達し、その間をぬっての、迷路のような2~3時間の散策は、目もくらむような断崖をのぼったり、深く静かな太古の水をたたえた淵をよぎったりする楽しさがあった。このあたりは何億年も前は海底であったのが、造山作用がすすんでこのような地形に変じたのだと聞かされ、そのスケールの大きさにがく然とさせられた。

シンポジウムの2日目に、われわれは中秋の名月を迎えた。その夜はよく晴れわたり、月が美しかった。こちらの人々から、中国では月の中に嫦娥と呼ばれる美しい姫と兎とが住んでおり、これに関して日本の竹取物語の原形のようなはなしを聞かされた。私たちにはその夜、豪華な名月の宴が催され、珍味の数々をご馳走になった。町の中心部にある碧湖公園では、明るく飾りつけられた楼殿が池の水に映えて美しかった。この地方の古い舞踏や、珍しい演奏なども行なわれ、満月のもと、エキゾチックな雰囲気のためのしきは、たいへん印象深いものが

あった。

おわりに

昆明滞在のあと、私は四川省の成都を訪れた。成都是人口300万を越える大都会で、市内に中国科学院所属の有機化学研究所、生物研究所、地質研究所などの研究所群のあつまった地区がある。この町も1979年に外人訪問者に解放されたばかりで、国際交流やシンポジウムの開催など、参加者のホテルの施設さえ整えば、近い将来に充分可能になろうと思った。

昆明については、古くマルコポーロの「東方見聞記」に、雲南土民の風俗の記述がのべられているが、日本から遠くはなれた中国奥地のことでもあり、今まであまり紹介されなかったように思う。雲南省は現在、省としても産業、技術の面で日本との交流をのぞんでおり、私は学術面でも、このようなシンポジウムの開催などを通じ、工科系の各分野において、日中間の交流を大いに深めていただきたいものと願っている。

〔参 考〕

- 1) 竹本喜一, O. Vogl: 「中国奥地での討論会」, 化学, 37, 134 (1982).
- 2) O. Vogl, K. Takemoto: "Symposium on Functional Polymers in Kunming, China", Polymer News, 印刷中.